

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01929

研究課題名(和文) 帝国解体と戦後秩序構築過程における大衆メディアのジェンダー・エスニシティ表象分析

研究課題名(英文) Analysis of the Representation of Gender and Ethnicity in Popular Media in the Process of Deconstruction of Empires and Reconstruction of Post-War World Order

研究代表者

杉村 使乃 (Sugimura, Shino)

 国立女子大学・文芸学部・教授  
 国立女子大学・文芸学部・教授

研究者番号：20329337

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：これまでの英、米、中、独、日本の大衆メディアの表象分析・国際比較を活かし、今期は(1)「総力戦」下の女性やマイノリティの包摂と排除は、帝国解体と再編の過程でどのように変化したのか、(2)(1)のメディア表象への影響、(3)冷戦下における核開発競争、核の「平和利用」推進の中、ジェンダー・エスニシティはどのように表象されたのか、(4)(1)～(3)は1950年代、1960年代のジェンダー秩序、ジェンダー・エスニシティ表象、またそれ以降のフェミニズム運動にどのような影響を及ぼしたのか、これらの問題を明らかにするため1960年代まで視野を広げ対象国の大衆メディアの分析・国際比較に取り組んだ。

研究成果の概要(英文)：This research group has been focusing on the analysis of the representations of gender and ethnicity through popular media in Britain, US, China, Germany, and Japan during the World War II. In this term, we have been developing the research considering the post-war conditions as follows. (1) How was inclusive or exclusive campaign for women or minorities during the war changed in the process of the deconstruction and reconstructions of empires? (2) How did these changes influence the media? (3) How did the competitive development of nuclear weapons and what was called “Atom for Peace” during the Cold War influence the representation of gender and ethnicity? (4) How were these significant for the gender order, the representation of gender and ethnicity, and the feminism movements in 1950’ and 1960’? This research shows the cases of the countries by the analysis and international comparative studies of the popular media.

研究分野：イギリス文化・文学

キーワード：ジェンダー メディア 戦後秩序 エスニシティ 国家 表象 身体 表現

### 1. 研究開始当初の背景

本共同研究は「戦争とジェンダー表象研究会」として、2004年より、第二次世界大戦下、イギリス・アメリカ・中国・ドイツ・日本の大衆メディアのジェンダー・エスニシティ表象を分析し、国際比較を行ってきた。国内外で表象研究、戦時下のメディア研究が盛んになってきた時期と重なる。

戦時下において、女性やマイノリティは、「国民」として動員され、大きな貢献を果たした。これまでの研究により「総力戦」下では、女性の戦時活動は既成のジェンダー秩序を揺るがすものであったことが明らかになった。一方、「自由」を謳う民主主義国家イギリスやアメリカにおける「女らしさ」の強調、「母性主義」を謳っていたドイツの女性の軍事化など、矛盾も見られた。戦時下のメディアでは総力戦にふさわしい「国民」の再生産のために言説と画像が意識的に操作され、戦況によって女性やエスニックグループを国家にとって都合良く包摂・排除するため、表象には揺らぎが見られた。

### 2. 研究の目的

2015～2017年度の研究においては以下を明らかにするために分析を進めた。(1)「総力戦」で見られた女性やマイノリティの「国民」への包摂は、「帝国」が解体・再編される中でどのように変化したのか。(2)(1)はメディア表象にはどのような影響を与えたのか。(3)冷戦下における核開発競争、核の「平和利用」が推進される中、メディアにおいてジェンダー、エスニシティはどのように表象されたのか。(4)(1)～(3)は1950年代、1960年代のジェンダー秩序、ジェンダー・エスニシティの表象、また以降のフェミニズム運動にどのような影響を及ぼしたのか。これらを明らかにするため、国家や「国民」、またジェンダー秩序を再構築していく上で重要な手段である大衆メディアを取り上げ、表象分析と国際比較を行った。

### 3. 研究の方法

第二次世界大戦期から継続して、イギリス・アメリカ・中国・ドイツ・日本において刊行された女性雑誌・一般大衆誌、また映画などの大衆メディアを資料として、1960年代まで視野を広げ、資料収集・分析に取り組み、研究会にて国際比較を行った。

杉村使乃はイギリスの『ピクチャー・ポスト』(Picture Post: Hulton's National Weekly 1938-1957)を主に取り上げた。平塚博子は『ライフ』誌(Life 1883-2007)の分析に取り組んだ。神田より子は戦時中に刊行された『アサヒグラフ』(1923-2000)を分析対象に選んだ。この3誌はフォトジャーナリズムという共通点を持っている。桑原ヒサ子は戦前、戦時下のドイツで出版されていた『ナチ女性展望』(NS Frauen Warte 1934-1945)に加え、戦後を考えるために女性

雑誌『コンスタンツェ』(Constanze 1948-1969)の分析を開始した。池川玲子は、戦時下から1960年代まで広く日本映画表象分析を担当した。中国近現代史、エスニシティ・「国民国家論」研究に実績のある松本ますみは連携研究者として、中国におけるメディア分析を担当し、『良友』画報(1926-1945)、『北支画刊』(1938-1939)、『北支』(1939-1943)、その他、現代に至るまで様々な資料を分析した。日本近代史、女性史の研究者で、日本女性の戦後研究の草分けであり、多くの研究実績のある加納実紀代(『戦後史とジェンダー』、『天皇制とジェンダー』、『ヒロシマとフクシマのあいだ：ジェンダーの視点から』他著書多数)は研究協力者として、新聞、雑誌、映画だけでなく、記念碑や彫像、様々な戦争に係る展示など、広く日本に関するメディア表象分析に取り組んだ。また、本研究全体に批評を与えてくれた。それぞれの分析については、定例研究会を1年に2回程度開催し、国際比較を行った。

### 4. 研究成果

イギリスの写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』は第二次世界大戦中、困難の中、動揺することなく戦うイギリス市民というイメージを写真で伝え、「民衆の戦争」神話構築に貢献した。終戦は「核時代の到来」として表象され、冷戦下、アメリカ・ソ連の核開発競争、いわゆる「原子力の平和利用」にイギリスも積極的に係っていく様子が紙面から伺うことができる。

『ピクチャー・ポスト』の表紙は白人とその文化に殆どの関心が向けられていた。大英帝国が解体していくにつれ、表象においてもイギリス本国やイギリス人の優位性を全面に押し出すことは難しくなる。しかし、エリザベス二世の戴冠の表象には、コモンウェルス諸国の多様性を肯定的に描く一方、「帝国」の名残がそこに見え隠れしている。また、君主であり、母でもあるという新女王には戦時下に活躍した女性たちの姿と同時に、1950年代の家庭回帰の風潮に合った女性のイメージが見られた。

戦中から冷戦初期を通じて、アメリカ政府とメディアの結びつきは、世論だけでなくジェンダー規範や女性のイメージの形成において大きな役割を果たし、『ライフ』もその一翼を担った。例えば、第二次世界大戦中は、深刻な労働力不足という問題を受けて、政府は従来男性領域とされてきた領域での女性労働力の動員を図るべくメディアに新しい女性のイメージ作りを要請し、『ライフ』を含めて多くのメディアがそれに応じた。第二次世界大戦は、まさにアメリカ人女性の社会進出を促すと同時に、アメリカ社会における伝統的な「女らしさ」の概念に修正を迫る契機となった。

しかし、こうした女性の社会進出やジェンダー秩序の揺らぎはあくまで戦時という非

常時の期間限定的なもので、戦争終結後アメリカ社会は伝統的なジェンダー規範に回帰する。この時期の『ライフ』をはじめとするメディアも、「女性の社会進出は一次的なものであり、戦争という非常時が終われば女性は家庭に帰る」という政府のプロパガンダを踏襲し、女性表象において母性や家庭性を強調するものが目立つ。一方で、戦中就労を経験したこと、さらに戦後の社会状況が変化したことなどから、アメリカの女性たちにとって戦後の伝統的なジェンダー規範への回帰は、矛盾に満ちたものにならざるを得なかった。こうした矛盾や裂け目がより鮮明に浮かび上がるのが、1960年代である。戦後の公民権運動の高まりや、それに呼応するかのようになり高まるフェミニズムや対抗文化やベトナム反戦のうねりは『ライフ』が描く女性像にも影響を与えた。60年代の『ライフ』の表紙は伝統的なジェンダー規範を踏襲する一方で、記事においては矛盾と時代の変化を映し出しつつ、より複雑で多様なアメリカン・ウーマン像を提示する。この時期の記事には、これまで『ライフ』が規範として提示してきた郊外の戸建に暮らす白人中産階級の妻や母という枠組みに収まらない女性たちが、たびたび登場する。60年代の『ライフ』が、アメリカンファミリーの概念を書き換えつつ、多様なジェンダーやセクシュアリティの在り方を模索しつつあったことが明らかになった。

松本は国際比較のために、1930年代後半から1960年前後までの中国大陸のエスニック・マイノリティがどのように連続して表象されてきたのか分析した。1949年以前と体制が断絶していると考えられがちな中華人民共和国成立以降であるが、対外対内宣伝大衆メディア『人民画報』は過去の他体制と同じまなざしでエスニック・マイノリティを描いている。1937年から1945年までの日中全面戦争中（中国では抗日戦争という）、互いに交戦関係にあった日本も蒋介石の国民党中国も中国周縁部のエスニック・マイノリティ像を盛んに大衆雑誌に掲載した。政治的権力の正統性を誇示するためにエスニック・マイノリティ像を表象するという共通点が見られる。美しい民族衣装を着た「見知らぬ」民、特に若い女性を中華人民共和国の公式宣伝メディアは繰り返し表象してきたが、微笑む若いエスニック・マイノリティの女性像は抗日戦争以来の中国周縁部における時の政権の権力掌握と正統性の象徴であったのではないかと考えられる。

ドイツを担当する桑原はナチス時代に発行部数第1位の官製女性雑誌『ナチ女性展望』NS Frauen Warteの分析を通して、当時の女性たちがどう表象されているか研究してきた。歴史上かつてない規模の総力戦の中で女性たちは前線に送られた男性に代わって、農村や軍需工場、果ては「男性の聖域」である軍隊へも動員された。戦争は好むと好まざる

とにかかわらず、それまでは許されなかった職種に女性が就き、十分に能力を発揮できることを彼女たちに体験させることになった。

敗戦により国家が解体され、完膚なきまでに破壊された国土で、女性たちは戦後どう再出発したのか、戦後創刊の女性雑誌『コンスタンツェ』は貧困と窮乏の時代を生き抜いた女性たちの姿を浮き彫りにした。雑誌全体における広告割合、カラーページの増加は、西ドイツの経済復興と連動している。また娯乐的比重も極めて高い。戦勝国に強いられた過去への反省や政治的再教育によって娯楽を求める大衆の欲求は高まっていた。一方で何百万人もの戦死者や捕虜として未だに故郷に帰れない男性たちを想う苦しみや痛みの中に生活している女性読者が存在していたことが巻頭記事やルポルタージュからわかる。『コンスタンツェ』には夢を与える娯楽誌面と、それとは相容れない当時の窮乏と困難に晒された女性たちの姿を伝え、彼女たちを励ます記事が併存している。桑原はこの雑誌を通して、結婚問題、シングルマザーの実情、就労、そして男女同権をめぐる法改正について分析を行った。

日本については神田、池川、加納がそれぞれ異なる媒体を扱い、分析を進めた。

神田は1945年～1953年までに出版された雑誌『アサヒグラフ』を資料としてジェンダー・エスニシティ表象分析を試みた。1940年9月までの『アサヒグラフ』は国際的で文化的な傾向が強く、ヨーロッパ戦況の取り扱いなどはこの雑誌の呼び物だった。しかし日中戦争が深みに入ると、国内では言論の取り締まりも強化された。

戦時中の『アサヒグラフ』は時局宣伝雑誌の観があったが、戦後は新陣営で再出発となった。ジェンダー表象に関して表紙は相変わらず、若い女性、女優などが目立つが、キャリアを積んだ女性たちも表紙に掲載されるところが戦後らしい。また記事では1946年、20歳以上の男女が投票権を得て初めての総選挙、初めて誕生した39名の女性議員、婦人問題研究家の山川菊栄、労働党女性代議士、女性の保安隊員など、新しい時代を象徴する女性たちを取り上げた。また独立運動や闘争を始めたアジアの変貌ぶりを伝え、第二次世界大戦後、一気に変化した欧米の覇権争いと植民地政策を目の当たりにしたはずだが、彼らに追随をしていた日本が1945年8月以前にアジアでやってきた事についての言及はほとんどない。

池川は戦後日本の女性表象に着目し、映画を広く分析した。作り手としては1937年から1945年の間、「満洲国」に存在した満洲映画協会（満映）に在籍した女性映画人、監督坂根田鶴子（1904～75年）、編集者岸（旧姓：福島）富美子（1920年～）を大きく取り上げた。1945年8月の大日本帝国の崩壊以後は二人とも中国共産党によって留用され、自らの技術力を頼りに生き残った。そして日本

に引き揚げてきた後も、映画製作の現場で働き続けた。

彼女たちの戦中・戦後の移動は、一国的な映画史ではなく、1930年代から50年代にかけての、全世界的な地政学を視野に含めた時はじめて理解可能になる。第一次世界大戦後、欧米諸国は、動く映像を、総力戦遂行に必須の新しいテクノロジーとして利用するようになった。戦時期の大日本帝国もこれに倣った。満洲国を筆頭として、植民地である朝鮮や台湾、軍事支配した中国大陸の他の地域、さらに仏印、蘭印、ボルネオ、ビルマ、フィリピンなどの南方地域において、さまざまな映画工作を行った。戦後、中国大陸と北朝鮮は中国共産党が主導する映画の勢力範囲内となった。対して、南朝鮮と日本では、アメリカが「親米&反共」感情を醸成するために映画を利用し、東アジアにおけるヘゲモニーを確立していった。上記二人は植民地主義や侵略戦争それ自体には何らの疑問を抱いてはいなかった。製作現場の男尊女卑的な風土に反発し、男性に負けずに力を発揮できる場を求めていた二人に満映は願いを叶えてくれる場所を提供した。引き換えに彼女らに課せられたのは、国内の映画会社よりも、さらにジェンダー化され、かつ侵略戦争を徹底させるためのプロパガンダ作品だった。視点を変えれば、満映は、彼女たちのフェミニズムを利用してたくみに呼び寄せ、その力を包摂し、より強力なプロパガンダ組織を築いたともいえる。

加納の多岐に渡る研究成果については以下に示す論文、著書を参照されたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計15件)

- (1) 杉村使乃、空飛ぶヒロインの現実と虚構：『ガールズ・オウン・ペーパー』連載小説「女性空軍補助隊のウォーラルズ (Worrals of the W.A.A.F. 's、共立女子大学文芸学部紀要、査読無、64集、2018、1-16
- (2) 桑原ヒサ子、女性雑誌『コンスタンツェ』Constanze が伝える敗戦後のドイツ人女性 結婚、シングルマザー、就労、法律、敬和学園大学人文社会科学研究所年報、査読無 No.16、2018、47-62
- (3) 松本ますみ、寧夏山間地回族の「二〇年間の大災厄」の記憶とイスラーム復興、中国21、査読有、Vol. 48、2018、167-192
- (4) 杉村使乃、21世紀のナンシー・ドルー、共立女子大学文芸学部 文学藝術、査読無、41号、2017、19-35
- (5) 杉村使乃、イギリスの雑誌に見る第二次世界対戦下の女性像、女性史学、査読有、26号、2017、18-32
- (6) 松本ますみ、『一帯一路』構想の中の『鄭

和』言説、国立民族学博物館研究報告、査読有、No. 147、2017、37-60

- (7) 加納実紀代、書評『核の世紀-日本原子力開発史』、同時代史研究、査読有、10号、2017、118-122
- (8) 桑原ヒサ子、女性雑誌出版史と『ナチ女性展望』NS Frauen Warte、敬和学園大学研究紀要、査読無、26号、2016、23-43
- (9) 松本ますみ、日本占領期北京の中国ムスリム知識人のパレスチナ認識：『回教週報』の記事からみる、小林寧子編『アジアのムスリムと近代(3)：植民地末期の出版物から見た思想状況』(上智大学SIASワーキングペーパー-NIHU Program, Islamic Area Studies)、査読有、26号、2016、51-64
- (10) 桑原ヒサ子、ドイツ人女性の戦後 『零時』からの出発、敬和学園大学人文社会科学研究所年報、査読無、No.13、2015、1-20
- (11) 平塚博子、冷戦・グローバリゼーション：閉じられた南部の終わりの物語としてのウィリアム・フォークナーの『館』、Soundings、査読有、2016、42号、5-18
- (12) 平塚博子、『リロイ・ジョーンズ/アミリ・バラカの自伝』におけるアミリ・バラカの新たなブラックネスの模索、黒人研究、査読有、84号、2015 46-54
- (13) 加納実紀代、『原子力の平和利用』と近代家族、ジェンダー史学、査読有、11号、2015、5-1
- (14) 加納実紀代、女性史から照射する 3.11と8.15：近代主義の向こう側、季刊ピープルズ・プラン、査読有、69号、2015、65-76
- (15) 加納実紀代、原爆表象とジェンダー、FORUM OPINION、査読有、29号、2015、29-36

[学会発表](計29件)

- (1) HIRATSUKA Hiroko, The women as Cold Warriors (East Asia and Gender in American Magazines early Cold War era), Panteion University Department of Political Sciences and History, Athens, Greece. (招待講演)(国際学会) 2018
- (2) MATSUMOTO Hogara & HIRATSUKA Hiroko, Not "Just a Middle-Class Housewife": The Representation of the Changing Roles of Women in Popular Periodicals" Panteion University Department of Political Sciences and History, Athens, Greece. (招待講演)(国際学会) 2018
- (3) 松本真澄、北部湾区域経済国際研究会、広東海洋大学寸金学院、湛江市、中国(招待講演) 2018
- (4) 杉村使乃・平塚博子・池川玲子(司会・コメンテーター)・松本ますみ パネルD 大衆メディアに見る「総力戦体制」の表

- 象と戦後における連続性、ジェンダー史学会 第 14 回年次大会、奈良女子大学、2017
- (5) 松本ますみ、理工系大学における『大学改革』といわゆる『軍事研究 - 北海道の地域貢献型大学から考える -』第 16 期遠友学舎、クラーク講座開講記念 軍学共同と大学のあり方 - 札幌農学校・北海道大学と平和国家日本 -、日本平和学会プレ企画、北海道大学、2017
- (6) 松本ますみ、「産学官金」と業績主義に揺れる大学と学問の自由 - 北海道の地域貢献型大学から考える、日本平和学会 2017 年度 春季研究大会、北海道大学、2017
- (7) 松本ますみ、戦時下日本人のシルクロードと中国少数民族イメージ、南山大学アジア・太平洋研究センター主催、外国語学部アジア学科共催 講演会、南山大学、名古屋市 (招待講演)、2017
- (8) 杉村使乃・神田より子 (コメンテーター)・桑原ヒサ子 (コメンテーター)・平塚博子 北海道大学メディア・コミュニケーション研究院共同研究 合同研究会『帝国』、『ジェンダー』、『表象』第一部戦後にみる帝国解体の表象、北海道大学、2017
- (9) 杉村使乃・平塚博子・池川玲子、Women in Uniforms: representation of Women in Japan, Britain, and the United States during WWII. 2017 WELL (Women Educators and Language Learners) Annual Conference and Retreat, 国立女性教育会館、2017
- (10) 松本ますみ、華北交通のジェンダー表象、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション学術院協働研究補助金「帝国解体と女性：断絶/連続する脱植民地の生活世界」プロジェクト、北海道大学情報教育館、2017
- (11) IKEGAWA Reiko, Japanese Women in Manchuria Film Association (Man'ei): Nationless Lives, Imperialist Discourses and Filmmaking Practices, Korean Association of Women's History, Seoul National University, Seoul, Korea (招待講演) (国際学会)、2017
- (12) 池川玲子、映画監督 坂根田鶴子の 1940 年代：北海道から『満州』へ、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション学術院協働研究補助金 帝国解体と女性：断絶/連続する脱植民地の生活世界プロジェクト (招待講演)、北海道大学情報教育館、2017
- (13) 桑原ヒサ子、『ナチ女性展望』NS Frauen Warte 女性による女性のための雑誌、日本独文学会シンポジウム VII 「時代を映す鏡としての雑誌 18 世紀から 20 世紀の女性・家庭雑誌に表れた時代の精神を辿る、関西大学、2016
- (14) 平塚博子、冷戦期南部小説としてのウィリアム・フォークナーの『館』、国際文化表現学会第 12 回全国大会、日本大学法文学部、2016
- (15) 平塚博子、60 年代アメリカにおけるメディアとジェンダー表象：『ライフ』誌が描いた『アメリカン・ウーマン』、ジェンダー史学会 第 13 回年次大会 武蔵大学江古田キャンパス、2016
- (16) 池川玲子、明滅する『青鞥』：占領下映像の中の『日本女性史』、ジェンダー史学会第 13 回年次大会 シンポジウム「日米関係の中の『戦後民主主義』再考：ジェンダー表象からのアプローチ (招待講演) 武蔵大学江古田キャンパス、2016
- (17) 池川玲子、謎の胎盤人形：見世物と医学のはざま、イメージ&ジェンダー研究会 2016 年 9 月研究会&ミニ・シンポジウム、武蔵大学江古田キャンパス、2016
- (18) 平塚博子、Ann Petry の The Narrows における人種・ジェンダー・冷戦、日本アメリカ文学会第 55 回全国大会、ノートルダム清心女子大学、2016
- (19) 松本ますみ、日本の回教工作、華北交通写真シンポジウム (招待講演)、日本カメラ博物館 (東京都千代田区)、2016
- (20) 松本ますみ、一带一路構想の中での『鄭和』言説：中華民族の英雄か回教の英雄か、国際シンポジウム「中国における歴史の資源化：その現状と課題に関する人類学的分析」国立民族博物館 (招待講演)、2016
- (21) MATSUMOTO Masumi, Islamic and Chinese Peripheral Studies in Imperial Japan: A Problem of Japan's Sinology and the Legacy of Romanticized Silk Road Discourses, China and the Indian Ocean: Discovering and Sharing Mutual Cultural Heritage, Hyatt Regency Dubai Creek Hotel (Dubai, UAE), 2016
- (22) 神田より子 (代表 共同) 宮古市東日本大震災の記憶を記録する 第 12 回全国女性史研究交流のつどい in 岩手、岩手県立大学宮古短期大学部、2015
- (23) 池川玲子、日本女性学習財団ぶっく・とーく：池川玲子『ヌードと愛国』 (招待講演) 日本女子会館 (東京都港区)、2015
- (24) MATSUMOTO Masumi Hui Muslims' Attentions to Palestine/ Middle Eastern Problems under the Japanese Occupation (1938-1945): An Analysis on the Descriptions on Huijiao and Huijiao Zhubao, International Conference Reconnecting China with the Muslim World, University of Malaya, Asia Pacific Exchange and Cooperation Foundation, Zhenghe International Peace Foundation, University of Malaya (Kuala Lumpur, Malaysia), 2015
- (25) Matsumoto Masumi, Images of

Mongolians and Hui-Muslims from Japanese Photographers' Eyes: What the Kahoku Kotsu Photo Collection Tells Us, Association for Asian Studies (AAS-in-ASIA Conference 2015) ASIA in MOTION: Ideas, Institutions, Identities, Academia Sinica (Taipei, Taiwan), 2015

- (26)加納実紀代、平和の礎としての女性史を、(基調講演・招待講演) 第12回全国女性史研究交流のつどい in 岩手、あえりあ遠野交流ホール、2015
- (27)加納実紀代、戦時下の農村から、日本近代を透視する(招待講演) 山川菊栄記念会、YMCA アジア青少年センター(東京都千代田区)、2015
- (28)加納実紀代、戦後70年ほんとうの『積極的平和』を求めて(招待講演) 第62回母と女性教職員会の会 長崎集会、長崎市教育会館、2015
- (29)加納実紀代、立つ瀬がない 加害/被害の二重性を超えて(招待講演) 被爆70年ジェンダー・フォーラム in 広島、広島市留学生会館、2015

〔図書〕(計14件)

- (1)戦争とジェンダー表象研究会編・共著 杉村使乃、桑原ヒサ子、神田より子、平塚博子、池川玲子、松本ますみ、報告書 帝国解体と戦後秩序構築過程における大衆メディアのジェンダー・エスニシティ表象分析、共立速記印刷、2018、117
- (2)池川玲子 共著、妊婦 アート論 孕む身体を奪取する、青弓社、2018、147(102-117)
- (3)神田より子 編著、東日本大震災宮古市の記録 第2巻(下)記録伝承編、宮古市、2017、764
- (4)加納実紀代 共著、ジェンダー研究を継承する、人文書院、2017、524(278-299)
- (5)加納実紀代、東郷和彦他編、対話のために「帝国の慰安婦」という問いをひらく、クレイン、2017、332(194-212)
- (6)桑原ヒサ子 共著、時代を映す鏡としての雑誌 18世紀から20世紀の女性・家庭雑誌に表われた時代の精神を辿る、日本独文学会研究叢書、No.124、2017、93(36-54)
- (7)松本ますみ 共編著、北海道で生きるとのこと：過去・現在・未来、法律文化社、2016、141(53-83、124-126、127-141)
- (8)松本ますみ 共著、京都大学人文科学研究所所蔵 華北交通写真資料集成(論考編) 国書刊行会、2016、335(176-192)
- (9)MATSUMOTO Masumi, Jonathan LIPMAN Ed. Islamic Thought in China: Sino-Muslim Intellectual Evolution from the 17th-21st Century, Edinburgh: University of Edinburgh Press, 2016, 288(171-196)

- (10)MATSUMOTO Masumi, Kamrul Hossain and Anna Petreitei Eds. Understanding the Many Faces of Human Security and Perspectives of Norther Indigenous, Boston: Brill, 2016, 254(105-122)
- (11)MATSUMOTO Masumi, Ma Haiyun, Cai Shaojin, Ngeow Chow Bings Eds. Zhenghe Forum: Connecting China and the Muslim World, Kuala Lumpur: University of Malaya Press, 2016, 254(135-146)
- (12)池川玲子 共著、歴史をひらく：女性史・ジェンダー史からみる東アジア世界、御茶ノ水書房、2015、252(165-179)
- (13)松本ますみ 共著、小浜正子編、ジェンダーの中国史、勉誠出版、2015、295(147-166)
- (14)松本ますみ 共著、澤井充生・奈良雅史共編、「周縁」を生きる少数民族：現代中国の国民統合をめぐるポリティクス、勉誠出版、2015、325(145-179)

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

〔その他〕  
ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

杉村 使乃(SUGIMURA, Shino)  
共立女子大学・文芸学部・教授  
研究者番号：20329337

### (2)研究分担者

桑原 ヒサ子(KUWAHARA, Hisako)  
敬和学園大学・人文学部・教授  
研究者番号：70234630

神田 より子(KANDA, Yoriko)  
敬和学園大学・人文学部・教授  
研究者番号：40247424

平塚 博子(HIRATSUKA, Hiroko)  
日本大学・生産工学部・准教授  
研究者番号：80407379

池川 玲子(IKEGAWA, Reiko)  
大阪経済法科大学・アジア太平洋研究センター・研究員  
研究者番号：50751012

### (3)連携研究者

松本 ますみ(MATSUMOTO, Masumi)  
室蘭工業大学・工学研究科・教授  
研究者番号：30308564

### (4)研究協力者

加納 実紀代(KANO, Mikiyo)